点訳フォーラムＱ＆Ａ

2020年４月～2021年３月版

第５章　書き方の形式

その１　本文の書き方

１．p147　1. 行替え・行移し

行替え、行移しについて伺います。今、校正中の本の中で登場人物の一人の心の内を（～）を使って書かれている本があります。

原本では（～）の書き出し位置は行頭です。点訳者は原本に忠実に行頭から点訳しています。「と」などの助詞が来た時には行頭からの点訳ができると「てびき」に書かれていますが（～）の文章も同じように扱ってよいのでしょうか。又、「てびき」には「原文の意図や目的によって特に必要な場合は、行替えして一マス目から書くことが出来る」と書かれています。これはどのような場合なのでしょうか？

今回の本はこのように書かれています。

大きな声であいさつされる。

（チョイス？）

上野先生は、顔をしかめる。

（ああいうあいさつはいらないね）

上野先生は腹のなかで考える。

（なんにも中味がない。ただ形だけのあいさつをして満足している）

上野先生は、こわれかかったベンチに腰をおろして、ぼんやりグランドを見つめていた。

【Ａ】

ご質問の原文では、（～）の部分は、行替えして３マス目から書きます。

「原文の意図や目的によって特に必要な場合は、行替えして一マス目から書くことができる」に該当する例はほとんど思い当たりませんが、たとえば、戯曲の台本等で、話者の始まり位置が分かりやすいように、一マス目から書き始める場合などもあり、「絶対にない」とは言い切れないので、書き添えたところです。

２．p148　１．行替え・行移し【処理３】

原文中に▽をはさんで、箇条書きのように句点のない文章が三つ、併記してあります。１文めが前文の行移しで書いてあるので、▽を句点と改行で書くと、内容的に整いにくい印象です。▽を句点に換えるのみで、改行しないことはできるのでしょうか。／を二マスに代えるとすることはＱ＆ＡのＱ118に書かれてあります。

【Ａ】

▽を句点に代えて、行替えしないで書くこともできます。

墨字で用いられていて、直接に対応する点字の記号がない　▽　／　▲　などは、原文でどのように使用されているかを判断して、適切な記号やマスあけに代えるなどして書くことになります。

ですので、▽があったら、必ず句点と改行をセットで用いなければならないというわけではありません。

３．p148　１．行替え・行移し　【処理３】

次の文の▽はどのように点訳するのがよいのでしょうか。

税の流れを追うといろんなことが見えてきた。兵器ローンの返済が膨らみ、予算が足らなくて補正予算でこっそり補填している▽米国製兵器をいったん買うと、廃棄処分するまでの維持整備費が何兆円とかかる▽・・・▽NSSが米国からの兵器調達を主導し、攻撃型兵器の導入が急速に進んでいる－－などだ。

これは、「兵器ローンの～などだ。」までを一つの文と考えて、▽を二マスあけにすればよいですか。それとも▽を句点にしてもよいのでしょうか。

【Ａ】

「兵器ローンの～などだ。」までが一つの文になっていますので、もっともシンプルな処理としては、▽の部分を二マスあけにすることになります。

それでもよいと思いますが、▽と▽の間がそれぞれ文になっていて、しかも中に読点もあるので、二マスあけにしても分かりにくいとも考えられます。

また、二マスあけの部分が行末にきて行移しになると二マスあけか一マスあけかの区別が付きません。

▽は、点字の記号にはありませんので、マスあけのほか、点字の記号に置き換えるという工夫もあります。この場合、それぞれの文をカギ類（第１カギ、または第２カギ）で囲むと分かりやすいと思います。

「兵器ローンの返済が膨らみ、予算が足らなくて補正予算でこっそり補填している」■「米国製兵器をいったん買うと、廃棄処分するまでの維持整備費が何兆円とかかる」■・・・■「NSSが米国からの兵器調達を主導し、攻撃型兵器の導入が急速に進んでいる」■－－■などだ。

４．p148　２．行末の扱い

「てびき」p148　２．行末の扱い【備考】にしたがって、数字付き文中注記符から行移しをしました。そのページの一番下の行の行末で、ちょうど単語が終わり、次ページの行頭に数字付きの文中注記符だけが移ります。

用語解説で言葉を説明するときに、点字のページをいれる場合、
⑤⑥数１②③■○○○○（２ページ）と、前のページだけを入れるか、（２～３ペー

ジ）とするか、どちらでしょうか

【A】

この点については、規則はありませんので、分かりやすい方で書くことになると思います。ご質問の場合、用語解説に、記号だけでなく記号の付いた語も入るので、（２ページ）だけでもよいと思います。

ただ、このような文中注記符の付け方は、できれば、避けた方がよいのではないでしょうか。

「てびき」p148　２．【備考】は「行末があきすぎる場合などに～できる」であって、２．の本則やp149【処理】もあわせて判断することが必要です。前のページの最下行が、たとえば行の半分くらいあいても、文中注記符だけを次ページに移動するよりも読みやすいと思います。

５．p148　２．行末の扱い

行末の扱いに関する質問です。

例えば「200～400メートルの」の場合、７マスあれば「200～」まで入りますが、この程度で行移ししますか。また「の」が入らないと14マスあきます。「行末があきすぎる場合」とは具体的に何マスぐらいでしょうか。

【A】

「行末があきすぎる場合」は具体的に示していませんので、各施設・団体で決めていただいていいのですが、「てびき」や「ハンドブック」「Ｑ＆Ａ」の点字版では、およそ10マス程度あく場合、「てびき」ｐ148【備考】(1)(2)のところで、行移しを行っていますので目安となるかもしれません。

ただ、機械的に考えずに、たとえば、行末７マスでも「200～」までその行に入れれば、１行少なくなって、見出し行がうまく入るなどがあれば、全体を見て柔軟に対応してよいと思います。

６．p149　３．行あけ　【処理】

原本に、１行あけの箇所と、米印(※)３個付いた行あけがある場合、どのように処理したらよいでしょうか。因みに※印行あけの後の文は、場面が変わっていますが両方とも１行あけでよろしいでしょうか？

【A】

１行あけの所も、※が３個付いた行あけも、点訳ではともに１行あけで構いません。１行あくことによって、読み手が場面転換や、時間の流れなど、判断できますので、※が付いているかどうかによって特に区別する必要はありません。※の行で本文が終わるなど、行あけとは異なる意味がある場合は、区切り線を用いてページ替えをしたり、仕切りのための線を用いたりする場合もあるかもしれません。

７．p149　４．挿入文の書き方

他から引用された文の書き方についてお尋ねします。

(1) 他から引用された文ではなく、また本文の流れと異なる文という判断もつかないのですが、つまり挿入文と言えるのかわからないのですが、原文で文全体が下げて書かれている場合は原文通り全てインデント機能を使って、二マス下げて書いてよいのでしょうか。

(2) 文全体が下げて書かれている箇所が長く、点字で８ページ位あります。そういう時は二マス下げて書くことはしないで前後１行あけでよいと聞いたのですが、行あけでよい目安はありますか。

(3) 長い字下がりの文の後、その中の文が２～３行位取り出されてまた字下がりで書かれています。それが何箇所かあります。最初の長文を二マス下げではなく行あけで書いた場合、それに合わせてその後の文も二マス下げは使わない方がよいでしょうか。それともその部分だけでも原本通り下げて書くべきなのでしょうか。または、長い字下がりの文でも、このような形式であるなら行あけではなく、二マス下げて書いた方がよいのでしょうか。

【A】

(1) 原文で全体に下げて書いてある場合は、何らかの著者の意図があると思われますので、挿入文と同じ扱いにした方がよいと思います。

(2) 点字で１ページすべて二マス下げて書いてあれば、下げて書いた効果はありません。前後１行あけた方がよいと思います。

(3) 厳密なルールがあるわけではありませんが、引用文や挿入文の書き方は、そのタイトルで統一した方が迷いなく読むことができると思いますので、統一した方がよいと思います。

８．p152　6. 二マスあけ

『　』で囲まれた書名の書き方についての質問です。

『岩波国語辞典　第７版』

この場合、第７版の前は一マスあけでしょうか、二マスあけでしょうか。

『新装版　昭和史発掘（全九巻)』

この場合の新装版の後と（　）の前のマスあけが分かりません。

【A】

この場合は、「てびき」p152　「６．二マスあけ」の(2)　①にある「書き流しで別の要素が羅列してある場合」にあたりますので、基本的に二マスあけになります。

『イワナミ■コクゴ■ジテン■■ダイ数７ハン』

カッコがある場合も二マスあけでもよいのですが、カッコがあることによって、別の要素との区切りが分かりますので、一般に一マスあけで処理しています。

『シンソーバン■■ショーワシ■ハックツ■（ゼン■数９カン)』
となります。

９．p152　６．二マスあけ

二マスあけについて、お尋ねします。

寄稿文などで、見出しの次行に寄稿者名（右寄せ）が

○○大学××学部△△科教授　○川△吉

と書かれてある場合、「てびき」p152(2)②を根拠に、教授と氏名のあいだは二マスあけとしました。

もし教授と氏名の間に空白がなく、

○○大学××学部△△科教授○川△吉

と続けて書かれてあった場合も二マスあけにしたほうがよいでしょうか。

二マスあけで書くとなった場合、上記と同じくマスあけを含む別の要素(肩書と氏名)が読点、中点を用いずに並列されていると判断して、教授の後ろを二マスあけとしてよいでしょうか。

二マスあけの根拠を示す時、いつも「てびき」p152の(2)の①と②で迷うのですが、今回の例は氏名の前に空白がある・なし両方ともに(2)の②で合っているでしょうか。

【A】

見出しの次行に寄稿者名などが書いてある場合は、点字では行末に揃えて書きますので、１行には収まらず、何行かに渡って書くことになります。そのような場合、最後の行に肩書きと氏名（教授■■氏名）と書くのが収まりがよいと思います。
最後の行が、△△科■教授■■氏名となる場合も、マスあけは同じです。「教授」「市長」「会長」などと氏名の間は二マスあけになります。原文に空白があるかどうかには関係なく、二マスあけとなります。

なお、二マスあけの根拠ですが、

(2)②は、

奈良には、東大寺 春日大社 法隆寺などがある。

材料は、鶏肉 サラダ油 塩 こしょう 化学調味料です。

のように、中にマスあけを含む語句が中点・読点を用いずに並列している場合を指しています。

ご質問の、「○○大学××学部△△学科教授○山×子」のような場合は，並列ではなく、異なる要素の羅列になりますので(2)①ということになります。

10. p152　６．二マスあけ　(2)　①

「別の要素」というのがよく理解できません。例えば次のような場合マスあけは

どうなりますか。小見出し扱いの文言です。

(1) 財務省キッズコーナーファイナンスらんど

(2) 宇宙科学研究所キッズサイト　ウチューンズ

これは①に該当するのかどうかもわかりませんが、「別の要素」とはどういう事を言うのでしょうか。

【A】

(1) (2) ともに、一つの名称ですので、「てびき」p152　(2)　①には当てはまりません。似たような例で、住所、ビル名、階数などが書いてある場合も、一つの住所ですので、番地のあとにビル名も一マスあけで書きます。

「別の要素」とは、p153の１番目と２番目の例のように「投稿締め切り」という見出し的な語句と、年月日と、「当日消印有効」という注意事項が並んでいる場合や、「全視情協事務局」という組織名と電話番号が並んでいる場合のように、種類(要素)の異なる語句が並んでいる場合を指します。

一マスあけでは、要素の変わり目が分からない、読みにくいという所です。

書名、作者名、発行所名などが、中点も読点も囲み記号もなく書かれている場合などがよく遭遇する例になると思います。

一人の人物の、姓名、性別、生年月日、血液型などが、読点も使わずに羅列されている場合もそうです。

このように、多くは、読点を入れたり、囲み記号で囲んだりするところなのに、それらを使わずに羅列されている場合を指します。

その２　見出しの書き方

１．p155　２．見出しの段階を示す文字や数字

見出しや箇条書きの番号の書き方について、実際の資料が

１．〇〇〇について

１．１．×××

１．２．×××

１．３．×××

２．△△△について

２．１．×××

２．２．×××

２．３．×××

上記のように書かれている場合、これをどう書いたらいいでしょうか。

数１．■数１．■
数１数１■■
数１－数１■■
などが考えられるのですが、分かりません。
【A】
こうしなければならないというルールがあるわけではありませんが、
数１＝数１．■　（＝は第１つなぎ符）
と書くのが自然な書き方と思います。

２．p155　２．見出しの段階を示す文字や数字

原本に次のように書かれています。
【前提】
・・・・・(本文)・・・・・
【問題定義】
・・・・・(本文)・・・・・
この【　】は装飾的な意味であると考えて、省略してよいでしょうか。上記の文は５マス目見出しの中にあるのですが、その場合、第１カッコで囲んだ方がよいですか。それとも、カッコで囲まず小見出し符を付けた方がよいのでしょうか。
【A】
【～】は装飾的な意味なので省略するという考え方は適切な処理であると思います。そのうえで、【前提】や【問題定義】が、５マス目から書く見出しであれば、ゼンテイ　モンダイ■テイギ　だけを書いていいのですが、５マス目から書く見出しの中にある場合は、第１カッコで囲んで３マス目から書くか、小見出し符を用いることになります。
このように、小さい見出しを第１カッコで囲んで書くことはよく行われています。「てびき」の点字版でも「備考」「処理」などは第１カッコで囲んで書いています。ほかに小見出し符類も用いるような場合もありますので、第１カッコで囲んで書いてもよいと思います。

３．p158　５．書き流しの見出し

番号付けのある、見出しが３マスから始まるときは、後ろに小見出符を付けないということを聞きました。この信憑性はいかがでしょうか。
また、小見出符を付けずに、改行して説明を３マス目から始めてもわかりますでしょうか。見出しに続けて２マスあけて説明を書く方がよいのでしょうか。
【A】
「番号付けのある見出しが３マスから始まるときは、後ろに小見出符を付けない」

というルールはありませんし、そう決めつけることもできません。

確かに、箇条書きのようなごく短い段落の場合は、それぞれに小見出し符を付ける必要がないということも事実ですが、番号を付けた小見出しに含まれる文が多かったり、少なかったり、小見出しで示す範囲がアンバランスだったりする場合などは小見出し符を付けた方が明らかになると言うこともあります。

小見出し符は最後に付くので、あってもそんなに邪魔になるものではありませんから、必要と思ったら付けて構わないと思います。

小見出し符を付けない場合でも説明を行替えして書いても構いません。

その３　詩歌・戯曲などの書き方

１．p166　２．短歌・俳句・川柳など

短歌や俳句のマスあけについて、５・７・５・７・７　の区切り目はすべて一マスあけとなるのでしょうか。文中に文の終わりと解釈できる箇所（倒置法での表現と思える場合などですが）があっても二マスあけることはないと理解すればいいのでしょうか。

詩の場合、１行中に文の終わりがある時（句点はない）は二マスあけていたのですが、短歌や俳句も同様の扱いと理解していました。短歌や俳句と詩の扱いは違うということでしょうか。短歌・俳句・川柳・冠句は短詩形ゆえに文の終わりと解釈できても二マスあける必要性がないと考えるのでしょうか。基本とする考え方をご教示ください。

【A】

詩・短歌・俳句の書き方を示している第５章その３では、書き始めの位置や行替えについて提示しているだけですので、マスあけについては、第３章、第５章の「その１」のルールに準じて書くことになります。

その意味では、短歌や俳句だから、二マスあけは絶対にないとは言い切れません。しかし、現在は、点字で読点を使用しなかった時代とは異なり、提示された主題の後ろ、倒置法の区切り目、感動や呼びかけを表す独立語の後ろなどでは二マスあけをしていませんので、俳句や短歌のなかで二マスあけを考えることはほとんどないと思います。「てびき」の例のなかでも例１、例２、例４、例５、例６などは、主題の提示や倒置法などと考えると二マスあけかどうか悩んでしまいます。

加えて、短歌や俳句はとくに韻律が重視されますので、二マスあけを入れることで流れが止まる感じになることを避ける意味合いもあるように思います。

破調の句や歌で明らかに二つの文からできている場合などを除き、俳句や短歌で

は基本的に一マスあけと考えてよいのではないでしょうか。

２．p172　４．手紙や公用文の書き方

組織名、役職、氏名が続く場合の件です。「出版に寄せて――〇〇〇〇」という見出しのあと行を変えて、所属の組織名と肩書、氏名が続いて中点もなく１行で書かれています。原本は、氏名の前は一マスあいていて、氏名は書体を変えてあります。この場合どのように書いたらよいでしょうか。３つが違う要素なので、その間は二マスあけでいいでしょうか？組織名のあと、うしろ７マス位あきますが、意図的に行替えして、肩書と氏名を書く事はしないほうがいいのでしょうか？

【A】

このような場合は、組織名・肩書き・氏名を行末に揃えて書きます。行末に揃える場合は少なくとも行頭は、10マス以上あけることになります。

所属・組織名、肩書きなどを行末に揃えて書く例は、「てびき」にはあまりありませんが、p173の公文書の差出人のような書き方になります。

行末に揃えて書きますので、１行に収まることはほとんどありませんが、１行に収まる場合は、組織名、肩書きなどと氏名の間は二マスあけます。１行に収まらない場合は、できるだけ組織名、肩書きなどの区切りで行を替えますが、行末の収まりなどのバランスも考えながら行替えをすることになります。

２行以上になる場合は、２行目以降は、１行目より二マス下げた位置から書き始めます。

例えば

行頭12マスあけ　トーキョート■チジ■■コイケ■ユリコ

行頭12マスあけ　フクオカケン■キョーイク■イインカイ
行頭14マスあけ　　キョーイクチョー■■サトー■イチロー

行頭10マスあけ　フクオカシ■ホケン■フクシキョク
行頭12マスあけ　　セイカツ■フクシブ■ホケン■ネンキンカ
行頭12マスあけ　　カチョー■■ヤマダ■イチロー

のようになります。

その４　表や図の書き方

１．p174　1. 表の書き方

「てびき」ｐ174からの表や図の書き方について質問いたします。
点訳挿入符で点訳上の処理事項を書いた後、必ず１行あいていますが、これは必ず必要なのでしょうか。また、点訳挿入符が終わり、次ページに移る場合、次ページ最初に１行あけは必要でしょうか。

【A】

「表記法2018年版」の編集委員会の過程で、表の注記を入れた後は、１行あけることにしましょうという合意があり、「表記法」ではすべて１行あけとなりました。これを受けて、「てびき」でも点訳挿入符で点訳上の処理事項を書いた後はすべて１行あけにしています。このようなことから、点訳挿入符を閉じた後は、１行あけることをお勧めします。

ただ、ページが変われば、次ページの最初の行はあけなくていいと思います。

２．p183　２．図の書き方

今、点訳している本は派遣添乗員の経験談を日記形式で書かれたものです。

添乗業務は春と夏が忙しく、冬は暇だと言う事が書かれている箇所に、カレンダーの絵があり、絵にはいつからいつまで、どこのツアーに添乗したかが記され、休みの日は空欄です。

しかし、本文を読むと繁忙期と閑散期の休みの日数を表したいための、カレンダーの絵だと思われます。本文には休みの日数の記載もありますので絵を省略したいと思っていますが、省略すると文章がつながらなくなります。

①参考までに、私の2014年10月の勤務カレンダーを次ページに掲載する。この月の休みは６日だけである。

②次ページのカレンダーをご覧いただきたい。第１章に掲載した繁忙期のものとくらべてスケジュールがスカスカなのが一目瞭然である。一か月に19日も休みがあった。

以上の原文を下記のように書き換えてもいいでしょうか。

①参考までに、私の2014年10月のカレンダーをみると、この月の休みは６日だけである。

②2014年１月のカレンダーをみると、第１章に書いた繁忙期とくらべてスケジュールがスカスカなのが一目瞭然である。一か月に19日も休みがあった。

【A】

原則として、原文を書き換えることはしないで、点訳ではカレンダーを省略したことを断ります。

①②のような記述が何度も出てくるような場合は、点訳書凡例で、「著者の勤務カレンダーのイラストは省略した」と断るのがよいと思います。

その上で、該当の箇所で点訳挿入符で囲み（省略）と断ります。

①参考までに、私の2014年10月の勤務カレンダーを次ページに掲載する（ショーリャク）。この月の休みは６日だけである。

②次ページのカレンダー（ショーリャク）をご覧いただきたい。第１章に掲載した繁忙期のものとくらべてスケジュールがスカスカなのが一目瞭然である。一か月に19日も休みがあった。

点訳書凡例で断らない場合は、該当の箇所で、

点挿　勤務カレンダーのイラスト省略　点挿

のように、より詳しく断った方がよいと思います。

３．p183　２．図の書き方

今回、図を点訳するときに言葉を補いました。まず枠線の中にタイトルを書き、点訳挿入符で注意書きを入れ、「説明のために言葉を補ったところがあります。」と書き入れましたがこの点訳挿入符の中には具体的に補った言葉を書いた方がよろしいのでしょうか。また図中にあらためてその部分を囲み記号などで囲んでいれるべきなのでしょうか。補ったところが数個あればすべてそのような処理が必要でしょうか。

【A】

図に言葉を補ったことを点訳挿入符で断れば、その言葉を抜き書きしたり、図の説明中で囲み記号で囲んだりすることは、一般的には必要ありません。

図は殆ど、言葉を補わなければ説明できませんので、簡潔に的確な言葉を補うように工夫してください。

ただ、原本に断片的で重要な語句がある場合で、それが原本の図にあることをどうしても示したい場合は、原本に書いてある語句の方をカギ類で囲むことはあります。その際、図を言葉で補ったことと共に、「原本で示してある語句はカギで囲んだ」または、「カギで囲んだ「〇〇」「〇〇」は原本に示してある」のように断ればよいと思います。

４．p187　３．区切り線・枠線

広報誌の点訳をしています。ページの最後まで本文があり、次のページの１行目に区切り線、２行目が、空白行になって３行目に次の見出しになります。この時、１・２行は省略して、次の見出しになってもよいのでしょうか。

【A】

ご質問に対して、てびきでは「ルール」を決めていません。

区切り線については、「てびき」には「用いても用いなくてもよいが、用いる場合は用法を統一するように」と記載されています。施設・団体によって、ご質問のような場合も必ず区切り線を書くところも、次の見出しが来ることによって区切りが分かるので、このような場合は区切り線を省略するところもあります。

ご質問からは少しずれますが、広報誌で、見出しと見出しの間に区切り線を入れてさらに１行の行あけを入れていらっしゃるようですが、広報誌のように決められた紙数により多くの情報を入れたい場合、見出しと見出しの間は、１行あけまたは区切り線だけでよいのではないかと感じました。これまでの経緯や読まれる方のご希望もあるでしょうから、蛇足かもしれませんが。

区切り線からページが移る場合、区切り線を省略するか、そのような場合も区切り線を入れるかは、施設・団体で決めて、しっかり統一することが大切と思います。

５．p187　３．区切り線・枠線

枠線の使用ではページの最終行に開きの枠線だけ、表などのタイトル（見出し）までしか入らない場合は、枠線から次のページに移すとありますが、区切り線の場合、区切り線を書き、見出しまでが最終行に来た時の点訳で悩んでいます。

区切り線は本文と区切るための線ですから区切り線が最終行に来ても良いとあります。でもここに見出しが最終行にくるときはどうしたらよいかと悩みます。

区切り線を使わない時は見出しだけ前のページに残さないと書かれている箇所がありこれには該当しないと考えて良いのでしょうか。

【A】

区切り線をご使用ということですが、区切り線は、「てびき」p187にあるように、本文中の章・節などでページ替えをする際の区切りに用いるもので、行頭・行末のあけ幅を揃えて中央に書くものです。区切り線の下は、ページ替えですから、ご質問のような悩みは出てきません。区切り線の次の行に行をあけないで見出しが来ることは一般には考えられません。

ご質問が仕切りのための線であった場合、仕切り線の次の行に５マス目から「写真説明」「注」などの見出しを書く場合は、その見出しは、一番下の行には書かず、次のページの１行目に書くことになります。

６．p187　３．区切り線・枠線

枠線と行あけの関係性について、お尋ねします。

「てびき」p187の区切り線と枠線の記述に《本文中の･･･（中略）囲み記事などの挿入を示すとき、行あけでなく区切り線や枠線を用いることができる》とあります。例えば、１冊の本の中で前の見出しの内容が終わり、コラムを点訳する際、枠線を用いずに点訳する場合は前の見出しの文章がおわり、行あけを行ってコラムの見出

しを点訳することになります。

コラムに枠線を使用するとなった場合、枠線が大きな区切りとなるので、前の本文と枠線の間の行あけは不要、ということでよいでしょうか。本文が終わったあと、行あけを行い、さらに枠線も使用してコラムを点訳ということはしないほうがよいでしょうか？

【A】

枠線で前後の本文との区切りは明らかですので、行をあける必要はありません。規則の厳密なところではありませんので、１行あけて枠線を書いても間違いというわけではありませんが、行をあける必要の無い所だと思います。

７．p189　３．区切り線・枠線　「コラム34」

文中注記符を付けた語の説明を次の見出しの前に挿入するとき、４マスあけ区切り線が頁の最下行になってもいいのでしょうか。また次の頁に区切り線をつけてもいいのでしょうか。

【A】

５マス目から書く仕切りのための線（「てびき」p186　p190にある線）は、本文との仕切りのために書きますので、そのページの最下行でも、一番上の行でも書くことができます。

その５　ルビやマークなどの書き方

１．p191　１．ルビの付いた言葉の書き方

数字の読み方にルビがある場合の分かち書きについて

１１９（いちいちきゅう）

消防の119番通報ですが、『119』にルビがふられていました。このルビは、一続きに書きますか？　「いち／いち／きゅー」と分けて書くのでしょうか？

「東京２０２０」に（にーぜろにーぜろ）とルビがあった場合は、どうでしょうか？

【A】

数字を仮名で書く必要がある場合は、拍数や意味のまとまりを考えて書きます。

「１１９」は、「イチイチキュー」、「東京２０２０」は「トーキョー■ニーゼロ■ニーゼロ」がよいと思います。

「ハチマル■ニイマル■ウンドー」や「シブヤ■イチマルキュー」などを参考にしてください。

なお、蛇足ですが、「にいぜろにいぜろ」と書かれている場合は、「ニイゼロ■ニイゼロ」と書きます。

２．p191　１．ルビの付いた言葉の書き方

以下のような文では、ルビを先に書いた方がいいのでしょうか、それともルビは後がいいでしょうか。

いきなり質問された。中国語だった。単語の意味は取れなかったが、語尾の語調から質問されたとわかった。「是、是（シー　シー)」と頷きながら、天宮は携帯端末を取り出し、音声入力アプリを起動する。

「もう一度言ってくれ（ザイシュウオーイービエン)」

カッコ内はルビです。この場合、「もう一度言ってくれ」は日本語とルビのどちらを先に点訳するのでしょうか。音声入力アプリなのだから日本語が先だと思うのですが見解が分かれています。

【A】

この場合は、音声アプリから聞こえた音声ですから、原音（ルビ）を先に書いた方がよいと思います。

「ザイ■シュウオー■イービエン（モー■数１ド■イッテ■クレ)」となります。

３．p192　１．ルビの付いた言葉の書き方　(3)

英語にルビが付いている場合についてお尋ね致します。

「てびき」では、仮名に、英語のルビが付いている例だけなので、迷っています。

いじめ防止アプリ　「Stop it」

この「Stop it」に、ストップ イット とカタカナのルビが付いています。

このようなとき

イジメ■ボーシ■アプリ■「ストップ イット（引大stop it引)」

イジメ■ボーシ■アプリ■「引大stop it引（ストップ イット)」

のどちらがよいのでしょうか。

もう一例、下記のLINEに「ライン」とルビがあります。

公式LINE開始

コーシキ■引大大LINE引（ライン）■カイシ

コーシキ■ライン（引大大LINE引）カイシ

のどちらでしょうか。

【A】

ご質問の例は、正式名称をアルファベットで書くアプリなどに読みやすいようにカタカナをふったものと思います。

文脈上、先にアルファベットで書いて、読みをカッコで説明するのがよいと思い

ます。アルファベット（外国語）を読むのが支障ない方は、カッコ内を飛ばして読むことになると思います。「てびき」ではp192の(3)にあてはまると思われます。
なお、外国語引用符を閉じた後にカッコ類を書く場合は、その間を一マスあけます。
「てびき」p107　(4)を確認してください。
　イジメ■ボーシ■アプリ■「引大Stop■it引■（ストップ■イット)」
　コーシキ■引大大LINE引■（ライン）■カイシ
となります。

４．p192　１．ルビが付いた言葉の書き方　(3)

　中国語の原音のルビについて質問します。図書は中国に駐在の経験のある人のエッセイです。漢字の音読みのルビはひらがなで、中国語の原音読みのルビはカタカナで振られています。
　高級幹部に「カオチーカンブ」、不慌不忙には「プーファンプーマン」のルビがあります。中国語原音のルビは切れ目なく一続きに書くのでしょうか。
　日本語にもある漢字の文言、高級幹部はカッコつきで（こーきゅー■かんぶ）と入れることはできるでしょうか。また、漢字が７、８文字が一続きに書かれた文章、あるいは格言の記述があり、一字ずつに原音のルビがあります。この原音ルビは全体を一続きに書くのでしょうか。
　　【A】
　中国語のルビも仮名で書かれた外国語ですので、「てびき」p26「外来語・外国語の書き方」【処理４】に従った上で、語のまとまりごとに区切って書きます。
「カオチー■カンブ」(高級幹部)、「プーファン■プーマン」(不慌不忙）のように、漢語からなる複合語の切れ続きに準じて、それぞれ対応する原音の部分を区切って書くのが読みやすいと思います。
　文脈によって、
　１．原音ルビを先に書いてカッコ内に日本語の音読みを添える
　２．日本語の音読みを先に書いてカッコ内に原音ルビを添える
　３．原音ルビだけを点訳する
のいずれかを選択することになります。
　「高級幹部」の例は１．か２．が良いと思いますし、「不慌不忙」のように漢字の音読みから語の意味が伝わりにくい場合や、日本では見ないような漢字が使われている場合、「ニーハオ」のように中国音が私たちにもなじみ深い場合などは、３．の処理をし、必要な場合のみ、晴眼者が漢字からイメージできる意味合いを点訳挿入符内に補ってはいかがでしょうか。
　（例）プーファン■プーマン((アワテズ■イソガズ))　など
　だいたいの意味は文脈から推察できることも多いので、説明は必要最小限にしま

す。

漢字７・８文字から成る格言も、原音ルビを漢字一文字ずつに区切るのではなく、てびきp70(3)に準じて漢語としての意味のまとまりを考え、原音ルビもそれに対応した区切り方をすることが原則になると思います。

５．p192　１．ルビの付いた言葉の書き方　【処理】

岩波少年文庫新版の『ドリトル先生』シリーズ井伏鱒二訳について質問します。

本文中に家の漢字にルビとして、ウチとついた箇所、家そのままルビなしの箇所があります。

先生のウチ、こんなウチにはいられない、など。

ルビなしの箇所の読みについて、

１．逐語にイエ、ウチの読みを考える

２．ルビの箇所はウチ、ルビなしの箇所はイエと読み、その旨を、点訳書凡例でいれる。

１．の場合は、困難な箇所もあり、点訳者の恣意が入るのではないか。

２．は晴眼者の読みと同じ立場です。利用者さんにも、その箇所の読みを考えていただく。

などと考えました。どのような対処が適切でしょうか。

【A】

岩波少年文庫で、井伏鱒二の訳と言うことであれば、前の版でも同様のルビの処理がされているのではないかと推測します。そして、「家」をどうしても「ウチ」と読ませたいところに一貫してルビがついているのではないかと、これも推測します。たとえば「我が家」の意であっても地の文にはルビがなくて、会話文にルビがあるなどが考えられます。読んでいて読者に違和感のないようになっているのではないでしょうか？

ですので、基本的に、ルビのあるところは「ウチ」で、ルビのないところは「イエ」と点訳してよいように思います。

ただ、この原本に限らず、一般的な処理として考えた場合、やはりその都度適切な読みを選択して点訳することになると思います。点訳は自動的、機械的な作業ではありませんので、そこに点訳する側の解釈・判断が入ってくることはある程度やむを得ないところがあります。迷うところは複数で相談することも必要になります。語の読み分けが、物語の性質上、または文脈上、大きな意味を持つのであれば、原文でこのような使い分けがしてあることを、点訳書凡例で断ることもあるかもしれませんが、一般的には、点訳書凡例で断ることはないと思います。

６．p193　２．マーク類の書き方

宣伝パンフレットに「詳細はこちら→」とあり、ＵＲＬのＱＲコードがあります。どうすればいいでしょうか。

【Ａ】

最近、パンフレットもそうですが、広報誌などでも、このような表現が多くなりました。

原文通りに「詳細はこちら　→」とだけ書いても意味がありませんので、点訳に当たっては、

ショーサイワ■コチラ■→■原文〇〇ページ右下にＱＲコードあり

または、単に「ＱＲコードあり」「墨字版にＱＲコードあり」といれるなど、原文に合わせて、ＱＲコードがあることを知らせるのがよいと思います。

点字資料を読む方が自分でアプリを操作しなくても、周囲の人に検索してもらって情報を得ることもできます。

原文の種類や、同じ情報が原文に掲載されているなど、ＱＲコードの情報が不要と判断した場合は，省略することもあります。原文の種類や文脈によって判断してください。

７．p194　２．マーク類の書き方　【処理１】

音楽ＣＤの小冊子中の英文に使われている記号（マーク）の書きかたを教えてください。

(P)2020　Seiji　Ozawa　Matumoto　Festival

(C)2020　Universal　Music　Operations

なお、(P)は、丸囲みのＰ、(C)は丸囲みのＣです。

【Ａ】

丸囲みのＰは、サウンドレコーディングコピーライトで録音、音源の著作権者、丸囲みのＣは著作権者を表しています。

英語では、記号で書かずに適切な言葉に置き換えて書くことになります。

この２行を点訳する場合は

Sound Recording Copyright　2020　Seiji　Ozawa　Matumoto　Festival
Copyright　2020　Universal　Music　Operations
と書くようになると思います。

ただ、一般には、ＣＤの内容に関するところだけを点訳し、おそらく小さな文字で書いてある著作権に関する表示は、通常は省略します。

その６　本文以外の割り付け

１．p198　３．標題紙　ほか

書名、特にシリーズ名などで、後ろに続く数字や上・下などとのマスあけについて、これまで、私は二マスあけるものと考えてきましたが、一マスでよいという方も結構おります。どちらがよいのでしょうか。

例えば

「皇国の守護者７」→「コーコクノ■シュゴシャ■■７」または「コーコクノ■シュゴシャ■７」

「家政夫のナギサさん　上」→「カセイフノ■ナギサ■サン■■ジョー」または「カセイフノ■ナギサ■サン■ジョー」

【Ａ】

ご質問のどちらの場合も二マスあけにします。標題紙の例２、奥付の例１、例２などを参考にしてください。

シリーズ名などの前の要素がマスあけを含む語句で、後ろの数字や上・下などは、その全体の番号ですので、二マスあけます。ただ、（上）（下）のように巻次がカッコで囲まれている場合は、誤解がないので一マスあけでよいと思います。

「てびき第３版Ｑ＆Ａ」Q149も参照してください。

２．p200　４．目次

本文が見出しなしで始まり、点字で６ページ目位で最初の見出しになります。以降は普通に見出しごとに本文が続きます。この場合、目次で点訳挿入符で囲んで

((ミダシナシ)) … 数１

としていいのでしょうか。

それとも見出しのない最初の本文は、目次では無視していいのでしょうか。本文の書き出し文を目次１行分ほど書く方法をとる点訳者もありますが、どの方法がよいのでしょうか。

【Ａ】

こうしなければならないという規則はありませんが、原文に該当する見出しがないのですから、点訳書の目次に項目を書くことができません。ですから、点訳書のページは１ページから始まらなくてもよいと考えます。点訳挿入符で見出し項目を書くことはお勧めしていません。

ご質問の本の場合、目次の最初の項目が、６ページでも構いません。

たとえば、下がり数字の１ページ目に献辞があって、「はじめに」が下がり数字の２ページから始まる場合、目次を下がり数字の２ページから始めてもよいのですが、「献辞」という一般的で分かりやすい項目を用いることができますので、目次には

「ケンジ」と書いて下がり数字の１ページから書くこともできます。「著者紹介」などもこれに当てはまります。

３．p200　４．目次

最近、原本の目次に「contents」と書かれているものがあります。

この場合、点訳書の目次では、１行目に原本通り「contents」と入れるべきでしょうか。それとも、目次は点訳書独自の物と考え、１行目には「モクジ」と入れて良いものでしょうか。

【A】

原文に「contents」と書いてあれば、原文通りにすることをお勧めしています。

４．p200　４．目次

現行の『「サピエ図書館」登録点字文書製作基準』の「3. 目次の書き方」【例２】に、２巻以降の内容を示す場合、３マス目から書き出し、２行にまたがる場合、二マス下がりでなく、１マス目に上がっています。２巻目以降の目次は「目次」とは違うのでしょうか。

【A】

この例の場合、第２巻目以降は、正確に言うと目次ではなく、第２巻目以降の内容紹介として、見出し項目だけを入れています。

ですから、第２巻以降は、見出しだけを、３マス目から書き出し、見出しが２行以上にわたる場合は２行目以降を行頭一マス目から書く書き方をしています。

例の枠囲みの下に※で書いてあるように、２巻目以降の目次はこの例のように項目だけを書く方法も、１巻目と同じように、点訳書のページ数も入れて、目次の書き方で書く方法もあります。

５．p200　４．目次

第２巻以降の目次について、「てびき第３版指導者ハンドブック」第５章編　p143下から５行目、点挿ツヅキ点挿のあとにページが記されていないのですが、この考え方をお教えください。ｐ１を何回も入れないという考え方でしょうか。

【A】

大見出し、中見出し、小見出しと何段階もの見出しがある場合、最も大きい見出しの直後に次の大きさの見出しがある場合など、ページ数を入れない方法も入れる方法もあります。墨字の本にもそのような書き方がありますが、点字でもどちらの方法を取っても構いません。

この例の場合、第２巻の最初に大見出しと次の大きさの見出しがあり、点挿で「続き」とあって、ページ数を入れるとすると次の行の15マス目から点線を書くことに

なります。小見出しもページだけを次行15マス目からの点線を入れて、ページ数を書いていますので、１ページにたどり着くまで６行も要することになります。このようなこともあり、ページ数を省略しました。

目次は、検索のために付けるものですので、正しくそして早くそのページにたどり着けるように工夫をすることも必要になってくると思います。

「ハンドブック」などでは、「てびき」の規則の範囲で、全国の施設・団体の慣習なども考慮し、特に５章の例は、「こういうこともできます」「これも間違いではありません」というものも提示しています。各施設・団体の蔵書作成の統一資料を作られる場合は、以上のことも考慮していただいたうえで、施設・団体として統一した点訳資料ができるよう、判断していただきたいと思います。

６．p203　５．まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

「てびき」には《著者（訳者）略歴（紹介）は、原本の記載事項に従って書く》とあります。表題紙の項には《原本のとおりとする》とありますので、表現の違いがあるのは、なにか意味があるのでしょうか。「原本の記載事項に従って書く」とは、具体的にはどんなことでしょうか。最近、「著者紹介」以外に「プロフィール」、「PROFILE」などの語句を使用している本が見受けられますが、点訳書の見出しを原本の記載通りにすると考えてよいでしょうか？

【Ａ】

「標題紙」には、書名、叢書名、副書名など、原本に書かれている項目と点訳書に書く項目、情報は、ほぼ対応していますので、「原本のとおり」と表現していますが、「著者（訳者）略歴（紹介）」などは、原本によって、見出しや書きかた、記載されている項目（事項）もまちまちですので、「原本の記載事項に従って書く」としました。

生年月日や略歴などが簡単に書いてある場合、出版された著書だけが書いてある場合、学会で発表した資料や文献まで詳しく書いてある場合、ＵＲＬなどが記載されている場合などがありますが、いずれも書かれている事項に従って書くということです。見出しも「著者紹介」だけではありませんので、原本通りに書いてよいと思います。

７．p203　５．まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

標題紙について、サピエの詳細検索で校正中の本のタイトルを確認しましたら、このように書かれていました。

ミス・マープルの名推理　予告殺人（ＨＪＢ）（ハヤカワ・ジュニア・ミステリ）ＨＪＢはハヤカワ・ジュニア・ブックスの略ですが、このような場合、ハヤカワ・ジュニア・ミステリと、（ＨＪＢ）も書いた方がよいのでしょうか。シリーズが二つ

あるときの点訳方法でよいのでしょうか。本の奥付にはなく、本の表紙に星の形の中に書かれています。

この本の表紙のうらに、「日本語版翻訳独占　早川書房」とあります。その下には翻訳を早川書房に認めた趣旨の英文がかかれています。取り交わしの書類の一部なのかもしれません。この英文の書き方で、点訳者は一行ごとに外国語引用符で囲んでいますが、すべての英文を一つの外国語引用符で囲むことはできませんか。

その英文の中に

Copyright ｃ 1950 Agatha Christie Limited

との一文があります。（Ｃは丸囲み）

この「丸の中のｃ」は省略して良いのか、カッコで囲んで書くならばどのように書けばよいのでしょうか。

【Ａ】

「ハヤカワ・ジュニア・ミステリ」は小学校高学年から中学生向けの読み物のシリーズですので、結論から申し上げると、ご質問に書かれていることはすべて省略してよいと思います。

（ＨＪＢ）は略称ですし、省略しない叢書名が標題紙・奥付に入っていれば、それ以上付け加える必要はありません。

表紙のうらの「日本語版翻訳独占　早川書房」に関する英文は、この物語の内容に関するものではなく、このシリーズ全体の早川書房の権利に関する断り書きのようなものですので、これも省略してよいと思います。

もし、原本にあることすべてを点訳する必要がある場合は、最終巻の本文・あとがき等が終わった後に挿入するのがよいと思います。

すべて英文の場合は、最初と最後に外国語引用符を付けるか、外国語引用符を省略することもあります。また、丸囲みのＣはCopyrightの意味なので、省略します。

８．p203　５．まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

「あとがき」について、原本には３行の著者の言葉が書いてあります。内容はお世話になった方々へのお礼と責任は著者に帰する、とあります。見出しはありませんが、点訳書には「アトガキ」と入れてよろしいでしょうか。

【Ａ】

「あとがき」の見出しが原文にないのですから、ページを替えて、見出しは入れずに、これだけを１ページに書いてよいと思います。

「献辞」や「著者紹介」などは、本の構成要素として点訳で補ってもいいと思いますが、「あとがき」には、見出しがいろいろ考えられますので、点訳ではあまり補うことはありません。目次にも入れなくてもよいと思います。

ただ、本文が前のページの最下行まで来てしまった場合は、ページ替えかどうか

の判断が付きませんので、次ページの１行目をあけて書くなどの工夫をした方がよいと思います。

９．p203　６．奥付

奥付の書き方について二つお尋ねします。

①　児童書や絵本の奥付に

作　○○

絵　□□

とあるとき、

点訳も「絵　□□」を書いた方がいいでしょうか。書いては間違いでしょうか。

②　ＩＳＢＮの書き方です。

ISBNのあとに書かれている　C0193　などの数字はいらないのかと思っていましたが、書いた方がいいのでしょうか。

【Ａ】

奥付は、「てびき」p203「６．奥付」(1)にあるように、「必要事項を取捨選択」することになっていますので、この項目を入れたから間違いと言うことはありません。

ただ、「てびき」p203　(1)に挙げてある①～⑦の項目や「てびき」「ハンドブック第５章編」の例など、目安となっている基本的な書き方には、「絵」を書いた人の氏名も、ISBNの後にあるＣコードも入っていません。

施設・団体で特に入れると決めていない場合は、入れなくてよいと思います。

10．p203　６．奥付

文庫本の奥付が書かれたページに　集英社文庫、集英社スーパーダッシュ文庫、コスミック・時代文庫、ハーパーBOOKSなどと記載されています。中には「角川文庫6621」ハヤカワ文庫では「JA1295」(本扉に　ハヤカワ文庫JA1295とある)、「新潮文庫う－18－2」などと書かれたものもあります。

「サピエ図書館」登録点字文書製作基準（2017.4）の奥付の例（P19）には、文春文庫とありますが、P20の点字には書名しか書いてありません。それに倣って「～文庫」はいれなくてもいいのでしょうか。それとも6621、JA1295、う－18－2　など数字のあるものはいれたほうがいいのでしょうか。

【Ａ】

叢書名の中には、文春文庫、新潮文庫、岩波文庫、岩波新書など、出版社名だけを冠したものがあります。そのような叢書名とその番号は、点訳書では、省略する習慣になっています。叢書名はシリーズの特徴を示すものですので、単に出版社名だけのものは省略するという考えです。

ですから、出版社名が入っていても、「岩波ジュニア新書」「ちくまプリマー新書」「講談社学術文庫」などは、入れるか入れないか、はっきりした指針は出ていないので、施設・団体によって幅があるようですが、このように対象を絞ったり、その本の特色を示す叢書名は入れた方がよいと思います。